

# 薄れゆく記憶「やばい」継承活動で学生ら覚醒

71回目の「原爆の日」を翌日に控えた8月5日夕。広島市の平和記念公園近くの路上には「友だちとの朝の通学」「楽しかった山菜採り」など、71年前と現在の「小さな幸せ」を描いた影絵22点が、ほのかな光に照らし出されていた。

テーマは「つなぐ」。制作した中高生らが代わる代わる作品に込めた思いを発表すると、多くの人が立ち止まり、真剣な表情で作品に見入っていた。

## 8・6を つなぐ 広島原爆の日

本紙記者報告①

いた。

「被爆の記憶が薄れてきていることは、本当『やばい』と感じる。平和の継承は難しいけれど、一人一人が考えるべきものだと思う」。影絵展を開く学生団体「影絵ユースワークショップ」代表の森長蓉子さん(22)＝広島女学院大4年＝は、同世代の平和意識の変容に危機感を抱き、2012年に団体を立ち上げた。

毎年原爆の日に合わせて、被爆者の体験を基にした影絵を通して日常にある平和の大切さを伝える活動には、市内の園児から大学生までの80～90人が参加。大学生メンバーを中心に、企画、構成などを手掛け、約5カ月かけて作品を完成させている。

広島城北中3年の渡辺充さん(15)は、小学6年生までを

他県で過ごし「原爆のことは全く興味がなかった」と打ち明ける。学校の授業で被爆者の生々しい体験を学び「吐きそうになることもあった」が、教員の勧めで参加した影絵展の活動を通じ、平和への思いが少しずつ芽生えた。「悲惨なことを扱っているけれど、重いだけじゃない。戦争は悪いことだと知ってほしいと思うようになった」と話した。

2年前の影絵展。森長さんは、被爆者の女性から声を掛けられた。「毎年8月6日が怖くて国外に逃げてきたけど、今年は影絵が見たくて残ったよ。ありがと」。静かに語る女性の言葉が心に深く染みわたる「続けていくことで、誰かの心に響いて平和の輪が広がる」と実感した。

8月6日の平和記念公園。

かつて多くの人が住んでいたこの場所には、平和を願う折り鶴が全国から寄せられている。愛媛大学生協学生委員会の学生メンバーも、毎年在学生らに折り鶴制作を呼び掛けて、広島や長崎などに千羽鶴を奉納している。今年の活動に携わった法文学部2年の片上亜紀さん(19)は「愛媛に住んでいると原爆のことは忘れがちになるが、鶴を折ることで平和について考えてもらうきっかけになってほしい」と力を込める。

平和はあるものではなくて、つくっていくもの。戦争を知らない世代が「86(ハチロク)」をつないでいくことが、平和をつくる確かな一歩となっている。

(伊藤愛)



「影絵を通して日常にある平和の大切さを伝えたい」と語る森長蓉子さん(左)＝8月5日、広島市中区